

## 研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-133	A-169	23-053	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
<b>題名 (原題/訳)</b>			
Adolescent alcohol and cannabis use and early adulthood educational attainment in the 1986 Northern Finland birth cohort study 青少年のアルコールおよび大麻使用と成人初期までの教育歴			
<b>執筆者</b>			
Levola J, Alakokkare AE, Denissoff A, Mustonen A, Miettunen J, Niemelä S.			
<b>掲載誌</b>			
BMC Public Health. 2024 Jan 22;24(1):255. doi: 10.1186/s12889-024-17693-w.			
<b>キーワード</b>			<b>PMID</b>
青少年、飲酒、大麻、社会的問題			38254063
<b>要 旨</b>			
<b>目的：</b> 青少年のアルコールおよび大麻使用と成人初期までの教育歴等の社会的問題との関連を明らかにする。			
<b>方法：</b> 北フィンランドの 1986 年生まれ 6564 人を対象としたバースコホートの 17 年追跡データにおいて、飲酒や大麻の初使用年齢、アルコール中毒回数、15,6 歳未満の大麻使用経験の有無などと 33 歳までの教育歴との関連を重み付き多変量調整ロジスティック回帰モデルで検討した。性別、家族構成、両親の教育歴、7,8 歳時点の行動感情障害の有無、15,6 歳時点の精神疾患の有無などを調整した。			
<b>結果：</b> 飲酒の初使用年齢が若く、アルコール中毒回数が多いほど、33 歳までの教育歴は低く、両親の教育歴や小児期の行動感情障害の有無を調整しても結果は同様であった。青少年期の大麻使用経験の有無は 33 歳までの教育歴との関連を認めたが、15,6 歳時点のアルコール中毒回数を調整すると統計的に有意な関連を認めなかった。			
<b>結論：</b> 青少年において社会的問題のハイリスク者をスクリーニングする際は、飲酒の初使用年齢、アルコール中毒回数などの情報を評価項目に含める必要がある。			